

「渋ビル」の立面構成が与える印象に関する研究 —名古屋市内の事例を対象として—

指導教員 加茂紀和子 教授

小林 千輝

1 背景と目的

高度経済成長期に建設された建物群が半世紀を超える現在、老朽化とともに存続の岐路に立たされている。一部の著名建築家によるものは改修再生が見られるものの、大半の無名な建物は解体・空きビル化している。一方、近年の多様性が認められる時代の中で、それらの無名な建物を魅力的に捉える視点が見られるようになった。その一例として「渋ビル¹⁾」が挙げられる。2008年より関西で活動する団体「BMC²⁾」がそれらを「渋ビル」として認定する活動を行って以来、名古屋、関東圏にも同様の視点を持って活動する団体や出版物が存在するようになった(表1)。ここには単にスクラップアンドビルドという経済論理ではなく、近代以降の都市における景観や建築の評価により建築自体を長寿命化させようという意図が表れていると考える。

本研究では「渋ビル」の一部事例を対象に立面構成の調査・分析及び立面に対する印象評価実験を行い、その評価構造の一端を明らかにすることを目的とする。

2.1 調査対象

雑誌「名古屋渋ビル手帖³⁾」の創刊号から第3号に写真が掲載されている建築物87件の中で、現時点(2024年9月)で現存している建築物56件を対象建築物とした。

2.2 立面構成要素とデザイン性の関係

「名古屋渋ビル手帖」より、建築物の外観の魅力に関する言説から「渋ビル」の立面構成に関わる要素を抽出した。各要素に対する著者の評価を把握するため、7つの立面構成要素とそれによる7つのデザイン性を抽出し、出現数のクロス集計を行った(表2)。最頻出の項目は〈テクスチャ〉の【装飾性】に關するものであり、特にタイルの特徴や美観性に関する表現が多く見られた。

3 クラスタ分析

言説より抽出した立面構成要素から、〈建具〉を除いた6つの立面構成要素及び各要素を細分した項目によりクラスタ分析(Gower法)を行った(表3)。その結果、「渋ビル」の56事例を7つの類型に大別することができた(図1)。

4.1 印象評価実験

それぞれの類型の特徴に適する事例を1件ずつ選出し、各類型の代表事例として、それらの外観写真

表1 活動団体と関連書籍

活動団体	発足年	関連書籍
BMC(ビルマニアカフェ)	2008	『月刊ビル』『いいビルの写真集』
名古屋渋ビル研究会	2011	『名古屋渋ビル手帳』『愛知渋ビル手帳』『鳥取渋ビル手帳』
東京ビルさんぽ	2017	『いいビルの世界東京ハンサム・イースト』『シブいビル』

表2 立面構成要素とデザイン性の関係

	デザイン性						
	【対比性】	【装飾性】	【垂直性】	【水平性】	【凸凹性】	【整然性】	【その他】
立面構成要素	〈テクスチャ〉	4	22		2	3	
	〈角丸〉		14				3
	〈開口部形態〉			7		6	
	〈色彩〉	12	15				
	〈付属物〉		11	2			8
	〈構成〉	7	3	6	3	4	6
	〈建具〉	1	9	1		1	

表3 類型化に用いる立面構成要素

①〈テクスチャ〉	(1)タイル	(2)塗装	(3)パネル	(4)複合型
	(1)なし	(2)立面上	(3)建物隅部	
②〈角丸〉				
③〈開口部形態〉	(1)水平連続窓	(2)ボツ窓	(3)垂直窓	(4)複合型
④〈色彩〉 (コントラスト)	(1)なし (2)あり	⑤〈付属物〉 (開口部周囲)	(1)なし (2)庇 (3)縁取り	
⑥〈構成〉 (意匠の切替)	(1)なし	(2)階層型	(3)並列型	(4)複合型

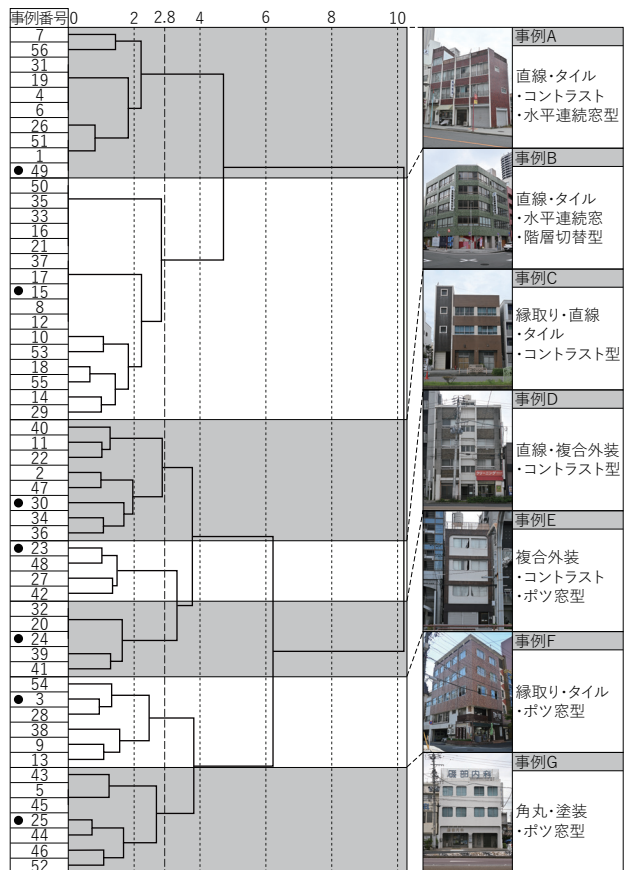


図1 クラスタ分析

(2L版)を用いて印象評価実験を行った。予備実験と参考論文⁴⁾より得られた28形容詞対(図2)について、被験者にSD法による7段階の印象評価を求めた。被験者は20代の建築学生の男女30名である。

4.2 実験結果

7 事例の印象量⁵⁾の平均値をグラフ化した (図 3)。グラフから読み取れる傾向として、『地味な一派手な』、『陰気な一陽気な』等では事例 G に他と異なる傾向が見られた。事例 G は他の事例と比較して、主な外装にタイルの使用がなく、使用色の明度の高さが見られる。平滑な素材感と全面的な白色の使用が明るく、魅力的な印象を与えている可能性がある。

また各形容詞対において、各事例の印象量平均の分散に注目し、印象のばらつきの指標とした (表 4)。分散が大きい項目として、『直線的一曲線的』、『垂直の一水平的』、『かたいーやわらかい』が見られた。『直線的』『水平的』は立面形態やテクスチャの使い方を直接的に表すものであり、『かたさ』は性質的な評価である。これらは 7 事例の建物外観の印象に大きく関わる形容詞対であると考えられる。

続いて、7 事例の立面構成要素による印象の差について、各形容詞対の印象量の平均値により比較を行った (図 4)。(角丸)の有無と〈開口部形態〉の違いでは共に『直線的一曲線的』、『かたいーやわらかい』等の項目に比較的大きな差が見られ、角丸形状及びポツ窓は外観の印象をやわらげる要素となっていると考えられる。また、『暗いー明るい』に対する影響は〈開口部形態〉による比較で〈角丸〉による比較よりも上位となる等の違いも見られた。

5 因子分析

印象評価における潜在因子を明らかにするために各事例ごとに因子分析⁶⁾を行い、各事例で 3～5 因子を抽出した (表 5)。その結果、『印象的でないー印象的』、『地味な一派手な』等を含む印象性因子が事例 E を除いた事例で第一因子となり、事例 E では『静かなー活気のある』等を含む活気性因子が第一因子となった。また『軽いー重い』等を含む重厚感因子が 6 事例で主要因子として見られた。

6 まとめ

「渋ビル」事例の立面に関して以下の知見が得られた。①名古屋の「渋ビル」の立面構成には 7 類型が得られた。各類型 7 事例の印象評価では②角丸とポツ窓を持つ事例はやわらかい印象を与え、主としてタイルを使用する事例は暗く、地味な印象を与える傾向にある。③『かたさーやわらかさ』等のばらつきの大きさから、角丸要素或いは開口部の形態は各事例の印象を分ける重要な要素であると考えられる。④建物外観に対し、概ね印象深さや重厚感が因子として印象に作用している可能性がある。

今後は研究対象を拡大し、関西、関東地域における「渋ビル」の立面構成及び印象の違いについても研究を行い、地域性、共通性についても知見を広げたいと考える。

1.よそよそしいー親しみのある	10.地味な一派手な	19.不安定なー安定した
2.古いー新しい	11.印象的でないー印象的な	20.かたいーやわらかい
3.不潔なー清潔な	12.落ち着かないー落ち着く	21.軽いー重い
4.ありふれたー個性的な	13.暖かいー冷たい	22.陰気なー陽気な
5.反復的でないー反復的	14.静かなー活気のある	23.非装飾的ー装飾的
6.対比的でないー対比的	15.無彩色なー色彩豊かな	24.平凡なー奇抜な
7.垂直的ー水平的	16.閉鎖的なー開放的な	25.女性的ー男性的
8.退屈なー魅力的な	17.整然としたー雑然とした	26.弱いー強い
9.直線的ー曲線的	18.暗いー明るい	27.無機質ー有機的
		28.凸凹したー平面的な

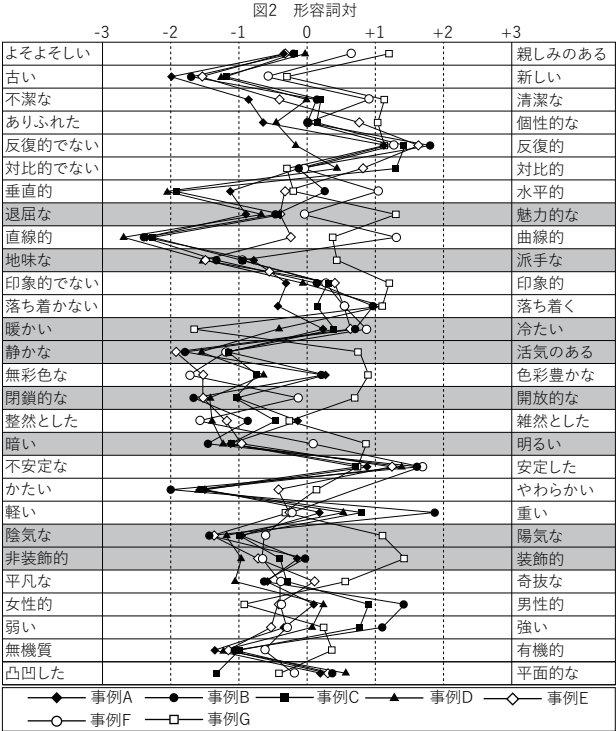


図3 印象評価実験結果

表4 各事例の印象量平均の分散

形容詞対(分散の降順)	分散	形容詞対(分散の昇順)	平均値	分散
直線的一曲線的	2.2609	不安定なー安定した	1.1857	0.1386
垂直的ー水平的	1.1227	印象的でないー印象的	0.276	0.1913
かたいーやわらかい	0.9136	平凡なー奇抜な	-0.334	0.2431
無彩色なー色彩豊かな	0.8195	落ちつくー落ち着かない	0.5619	0.2741
静かなー活気のある	0.698	整然としたー雑然とした	-0.8477	0.2840
暖かいー冷たい	0.6779	よそよそしいー親しみのある	0.1142	0.2961
陰気なー陽気な	0.6608	無機質ー有機的	-0.8715	0.3010



図4 要素別印象量図

表5 因子分析の結果と因子名

事例	因子名	印象性	重厚感	装飾性	活気性	素朴さ	装飾性	自然性
事例A	分散	4.7385	3.4004	2.5668				
	寄与率	15.633	12.144	9.131				
事例B	分散	4.1918	3.4004	2.5668				
	寄与率	14.971	12.144	9.131				
事例C	分散	3.8614	3.1461	2.8910			2.5033	1.9159
	寄与率	13.791	11.236	10.325			8.940	6.843
事例D	分散	5.2908	2.9642	2.7697			1.7618	
	寄与率	18.896	10.586	9.892			6.292	
事例E	分散	4.5641	3.0826	2.9166			2.3074	
	寄与率	16.300	11.009	10.416			8.241	
事例F	分散	3.7385	3.1422	1.8811			1.6983	
	寄与率	13.352	11.222	6.718			6.065	
事例G	分散	4.8254	2.7822	2.4158			2.3765	
	寄与率	17.233	9.936	8.628			8.488	

【注釈及び参考文献】
1) 高度経済成長期に建設された建物の中でも内観及び外観が魅力的に捉えられると判断されたもの。BMCや名古屋渋ビル研究会が主観的に認定する。2) 語口志保、寺嶋梨里らが愛知県を拠点に活動を行う団体「名古屋渋ビル研究会」が出版する雑誌。3) 「渋ビル」の発信を行う団体名「ビルマニアカフェ」の略。4) 趙雄ほか：都市型建築の立面の心理量分析－建築立面の構成要素による評価に関する研究－日本建築学会 2008 年 9 月。5) 被験者が各形容詞対の評価尺度において回答した値。6) 最尤法・Varimax 回転による因子分析を行った。因子数の決定は、スクリー基準によって行った。